第 2015-43 号

恵みと真理のニュース

2015 年 10 月の四次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］　神様の恵みで真実な信仰ある妻に出会って多様で豊かな救いの恵みを体験してから福音伝道に力を使うようになりまし

忠清南道のダンジンのアンソンという海の近くで住み偶像崇拝をする親のもとで 6人兄弟の次男で生まれました。私が18歳になる年、母は胃癌で亡くなって2年後には兄が急性肺炎で入院して 入院3日後にこの世を去りました。父親は母が亡くなって一人で子育てで苦しいなか長男まで亡くなり生きる意欲も失って毎日のように酒に酔って生活しています。父は正常的な生活が出来なくて私は高校卒業をしてからすぐお金を稼がなければならなかったです。村にある牧場で働きながら少ない収入で生活をしながら家の妹達に送金しました。そうするうちに共に働いた友達が結婚しました。うらやましくて結婚の問題で悩み始めました。しかし、私の状況では結婚するのは難しくてこのまま老けるのではないかと思いました。妹弟ため私が早く職業を探して家庭を作ると思って故郷を離れてオサンにある会社で就職しました。熱心に働いている時にソウルで住むおばさんから良い人がいるから会ってみたらどうと連絡が来ました。嬉しい心で約束した場所へ行きました。小さくて優しく見える姉妹がいました。当時、彼女はソウルのカンナムにある大きき教会で熱心に信仰生活をして教師と聖歌隊員で奉仕していました。
一目ぼれしました。しかし、姉妹は“私はイエス様を信じない人とは結婚しない。”と言われました。私の状況も話して結婚したらイエス様を信じ教会も通うことを約束をしました。念を押してやっと次に会うことを約束しました。二回会う日、姉妹が私を伝道して聖書をプレゼントしてくれました。“イエス様を是非しんじてください。”そして、これからこの聖書をどんな本より大事にしてください。と聞かれました。
1988年、ソウルのオリンピックが開かれた9月に結婚をしました。その日妻が歌ってくれた“愛の鐘”が今も忘れません。イサクにリブカを妻に出会えるように神様は私に信仰が良い知恵ある妻を出会わせてくださいました。
新婚の生活は思ったことと違いました。教会は自分の意志ですぐ行けるところではなかったです。主日なると一緒に教会へ行こうと誘う妻の話を聞いたふりもしなくて体が疲れるといい訳をして寝坊しました。その時ことに妻は賛美歌のテープを私の頭の近くにつけておいて、一人で礼拝に捧げてきました。
　そんな、私が神様の子供になり悔い改めてイエス様の所に来ました。娘を産んで喜びもありましたが心筋症という病気を持って生まれました。ソウルの大きい病院でも行ってみる努力はしましたが娘は六ヶ月も経てなくて天国に行きました。娘を荼毘し付した後家に帰って来る道で神様が畏れる方で私の心に来られました。毎日悲しんでいる妻にも私は罪びとでした。結婚したら教会に行きイエス様を信じると約束したが、肉体の情欲だけ従いながら生きて来ました。お酒やスポーツなどで心を奪われました。悲しんでいる妻を少しでも慰めるのは一緒に教会に行って礼拝を捧げることしかなかったです。破れて傷ついた心で教会へ行き妻と共に礼拝を捧げると限りない悔い改めの涙を流しました。神様の子であるイエス様は私のような罪人を生かせるためこの世に来られ、十字架に打たれて血と水を流して私の罪を赦してくださり新しく永遠な命のため復活されたことが信じるようになりました。真の愛でした。神様はその日から私の心を慰めてくださり、絶望で落ちっている私を救ってくださいました。　救いの恵みと真理を悟りました。
　その後、私の魂は驚くな変化がありました。全ての満物が新しく見え、神様が作ったこの世が美しく見えました。全ての人が愛らしかったです。何よりも教会に行く日を待つようになりました。礼拝の時間事に牧師の説教が耳に入り自ら聖書を読む読むようになりました。“ だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。”（コリント信徒への手紙二　5：17）見言葉の通り私が新しく被造物になったのです。このような大きい救いを神様が恵みでプレゼントでくださいました。ハレルヤ！
私の口では賛美歌102章“主、イエスより尊いのはない”心で賛美するようになり救いを福音を伝えたくなりました。家にいる横になっている時間がもたいなくなり福音を伝えたくなりました。神様は“あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。”（使徒言行録1：5）見言葉を下さり全ての祈りと伝道に力を使うように強く働いてくださいました。そのように日々救いの世転びと聖霊の感動の中で暮らしました。職場の福音化のため祈り伝道する中で一人の先輩が一人で伝道しなくて自分か導く集いを一緒に参席すると勧めました。先輩の話だったので断らなくて職員6人が毎日昼休みを利用してその集いに参席しました。　先輩は自分が属している本で礼拝を導きました。初心者で分別力がない私は先輩が導くとおり従いその教会まで行って教育も受けました。それでも熱心に伝道したい心で妻には話さなくて先輩教会を通い始めました。この事実を話したら妻は驚いてすぐ教区長に電話をして教えて恵みと真理教会に戻りました。
報告を受けた当会長牧師は私を呼んで親切に話してくださいました。その集団は韓国ですでに異端で規定された事実について話してくださいました。そこの集団に足を入ってはいけないとおっしゃいました。私のため祈ってくださいました。私は“教会の看板をつけても礼拝を捧げ、伝道するといって全てが正しい教会であることはないのを悟りました。
　牧師の教えと勧めで御言葉を感謝で受け全て従順しました。その後、祈りする所とかうちの教会が参与しない集いは一切行かなくなりました。そして、ただ教会でただ御言葉と聖霊に満たされ礼拝する事だけ楽しんで満足し感謝して周りの人から親戚に福音を伝えました。異端に陥らなくて健康な信仰生活をするように導いてくださる祈ってくださった当会長の牧師にも感謝します。
　始めの子を失って健康で聡明な子供を得るため妻と共に信仰と希望をもって神様に祈りました。すると、神様は私達に健康な娘を下さりその3年後に息子を与えてくださいました。“見よ、子らは主からいただく嗣業。胎の実りは報い”（詩篇127：3）御言葉を考え限りない喜びで神様に感謝しました。神様の恵みの中で子供達が健康で育てられ今は聖歌隊で奉仕して息子は軍宗兵で訓隊の教会を支えています。結婚して20年が過ぎ一人になった父親と一緒に暮らしながら多くの葛藤と苦しみがありましたが私達の夫婦は信仰で忍耐する事が出来ました。どんな状況でも“あなたの父と母を敬いなさい。”といった神様の御言葉に従順するだめ努力しました。私の祈りと期待に答えてくださり父もイエス様を受け入れ3年前天国に召されました。
　神様は私と妻に多くの福を与えてくださいました。去年、男性の区域長で20年間勤続賞を受けました。男性奉仕連合会の伝道ぶで23年間奉仕しながら毎週福音紙を持って病院を探して患者や家族に不信者たちに福音を伝えています。妻も聖歌隊で熱心に奉仕し伝道するのを自分の使命だと思いむしろ感謝し賛美しながら献身された妻に感謝しています。妻と共に信仰の道を導いて下さった神様に感謝します。主が来られる日まで福音伝道に力を尽くして多く実られるのを希望し、全ての栄光を主にゆだねます。

“　わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです　”（コリント信徒への手紙一　15：58）アーメン

［信仰コラム］　ヨハネの黙示録に啓示された五つのさいわい

“この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである。”（ヨハネの黙示録，1:3）

聖書には “さいわいである人” あるいは “さいわいがあり”と表現された句節がたくさんあります。この句節をよく見れば誰が本当にさいわいである人であり、また何が真のさいわいなのかを分かります。その中にヨハネの黙示録に記録されている “さいわいがあり”という七句節で ‘五のつさいわい’をよく見ます。
第一に、‘予言のお言葉を読む者ときく者等と守る者等が’ さいわいがあると言いました。
毎日聖書を読んで信実して熱心である信者にならなければなりません。 今日の教会では説教者が読んだ聖書句節を悟った心で詳しく説明してくれます。 説教をきいて聖書お言葉に対する理解と知識がますますつのらなければなりません。 全心をつくして神様のお言葉をきく人は神霊な信仰を得ながら信仰が育つさいわいを受けます。そしてお言葉は私たちに従順を要求します。 神様のお言葉が私たちの考えと言葉と行動を支配するようにしなければなりません。 神様のお言葉を守る者はさいわいがあります。
二番目で、“いまから以後で主にあって死んだ者等は”さいわいがありしました。
恵まれた死なのか不幸な死なのかを区別することは主にあっての死なのかないかにあります。 世の中に住むうちにいくら好衣好食して派手に住んでも主にあって住むことができなかった人に死は振り返えることができない苦痛と絶望に入って行く門になってしまいます。 しかしイエスキリストを信じて仕えながら生きてから死ぬ人、言い替えれば主にあって死を迎える人には死と言うのは永遠な安息に引導されて褒めと賞をくださる神様に進む過程に過ぎないです。
三番目で、“誰でも悟って自分の服を守って裸になって通わなくて自分の恥を見せない者”がさいわいがあると言いました。
ここにおっしゃる服はイエスキリストによって得るようになる義のあることと聖決を意味します。 悪魔は信者を世俗に染まるようにするとか、誤れた人本主義的な神学思潮に染まるようにするとかあるいは宗教多元注意を受け入れるようにして結局は服を守ることができずに裸になった状態にならせようと絶えず惑います。 ただイエスキリストの流した貴重な血だけが私たちの罪を洗うのが分かってイエスキリストのあがないの恵み外には救いがないのを固く信じる信仰を守らなければなりません。 イエスキリストによる義の服を着た者等は新しいエルサレム城の真珠の門を通じて生命の木がある城の中に入って行くようになるでしょう。
四番目で、“ 小羊の婚宴に招かれた者はさいわいである ” さいわいがあると言いました。
ここで小羊の婚宴というのはイエス様を信じてあがないを受けた聖徒がイエスキリストと一つになってイエスキリストとともに永遠で真正な喜びを享受するようになることを比喩的に表現した言葉です。 天国には死亡や哀痛することや大声で泣くことや痛いことや呪いや夜や俗っぽいことや憎した仕事や偽りを言う者がいないし悪魔もないです。 完全に楽しみだけがある所です。 聖徒の天国生活は実に喜びの日々になるでしょう。
五番目で、“第一復活に参詣する者等は” さいわいがあると言いました。
聖徒の復活を第一復活あるいは命の復活だと言って不信者の復活を審判の復活だと言います。 死亡にも第一の死亡と二番目の死亡があります。 第一の死亡はすべての人の死を言って、二番目の死亡は不信者が審判の復活をして最後の審判を受けてわずか硫黄で燃える火の池に投げられることを言います。 イエスキリストを信じる信者は審判を受けて燃える火の池に入る心配をする必要がないです。 第一復活に参加した者等は直接神様の前に引いて神様の臨むを享受して付き合いを分けるようになるでしょう。 そして王権を所有してイエスキリストといっしょに千年の間に王国を統治するようになるでしょう。 聖徒はこの第一復活に参加するようになるはずなのでさいわいがあります。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

絶望の谷間で救いの山頂で

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

人の一生には多かれ少なかれ違いはあっても誰にも波瀾と屈曲があります。そんなことが時によっては有害に作用して時によっては有益に作用します。 そのことに対処する人の態度と努力による結果です。 ところで自分の能力の外でのどんな作用によって問題が解決されて絶望の谷間で希望の丘の上に入るようになる場合があります。 こんな場合を幸運とも言って幸せとも言います。 しかしそんな幸せと幸運もそれを自分のものになるためには適切な処身をしなければなりません。 人の一生で経験するようになる最大の 幸せと幸運は滅亡の道に行っている途中に救いの道に移すようになるのです。 こんな幸せを自分の経験にならせる秘密が聖書に記録されています。 人が滅亡の道で救いの道に移すようになる重要な真理が今日の本文に要約されています。 これを一緒によく見ます。

本文の エペソ人への手紙, 2 章 1 節に記録されるのを ″ さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、″ としました。
罪過と罪の根本的な意味は人々に対したのではないで神様に対したのです。神様のみ旨を逆って行うことで神様の命令を破るのです。 その根源は人類の先祖アダムとエバが神様の命令を破って善悪を知る木の実を取って食べてから始まりました。 そして人は生まれる時から “罪過と罪で死亡者”です。 罪過と罪で死んだということは人の霊魂が神様の命から離れ去っている状態を意味します。 人の霊の実際は罪過と罪で死んだ状態です。 その魂が罪過と罪で死んだ人は彼の知識と知恵では万有の存在根源と理由と目的が分からないです。 またその人の感情には霊に属した喜怒哀楽がないです。 神様の愛で始まる幸せ感、聖霊の実である喜楽、天国の所望による喜び、復活に対する期待感が分からないです。 またその人の意志には神様を嬉しくしようとする意図がないです。 神様を礼拝しようとする意志がなくて神様の光栄を現わそうとする意志がないです。
本文の 2 節と 3 節に記録されるのを ″ かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、歩いていたのである。また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であった。 ″ としました。
罪過と罪で死んだ人々の生活状態は次の通りです。 第一、この世の中の風俗によって生きて行きます。 第二、 空中の権勢を取ったものの悪魔の支配の下に生きて行きます。 第三、肉体と心の願う欲に従って生きて行きます。 罪過と罪で死んだ人は本質上の神様の震怒の下にいます。 神様の震怒の下のいるというのを簡単に言わば地獄の刑罰に処するようになるのです。 私たちは死の以後に関しては聖書に記録されたお言葉で満足しなければなりません。

聖書に啓示されたこと外に人の体験に根拠したことは信頼性がないです。 死の向こう側の家所に関してはさまざまな用語が使われています。 陰部、楽園、神様の国、天国、新しいエルサレム、無底坑、地獄、火の池という用語を十分で明確にすべて理解することは難しいです。
陰部は悪人がいる苦痛の場所を指称します。
イエスキリストがおっしゃった金持ちとナザロに関する話で悪人がいる苦痛の場所と義人がいる安息と慰労の場所に区分されていて義人が住む所を楽園だと称しています。 無底坑は悪魔を千年の間閉じこめておく所です。 わずか硫黄で燃える池は悪魔とその使い者そして救いをもらうことができなかった者等が入って行くようになる究極的な刑罰の場所です。
肉体を離れ去った霊魂は天国と地獄のふたつの中に１ヶ所に行くようになると聖書は言います。 天国と地獄は来世を言う包括的な用語と言えます。 世の中でたとえ大変に暮すと言っても天国へ行くことができたら狭い道を歩いても昼も夜も喜ばなければなりません。 どうしようが地獄だけは行ってはいけないです。 聖書には “一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっているように、”(ヘブル人への手紙, 9:27)と記録されています。 “人が一度死ぬことは決めた”という事実が分からない人はいないです。 ところでその後に審判があるという真理に対しては無視して生きて行く人が多いです。 しかし無視してしまうと審判から除かれないです。 だから神様の審判はすべての人に必ず必要な知識で必ず備えなければならない一大事です。
本文の 4 節から 6 節まで記録されるのを ″しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし（あなたがたの救われたのは、恵みによるのである）
キリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。 ″ しました。
本質上神様の震怒の下にある人が救いを得るようになって神様の子になって光栄の継いで相続になったことは次のように説明することができます。 第一、あわれみに豊富な神様によったのです。 第二、途方もない犠牲を通じて現われた神様の愛によったのです。 第三、イエスキリストにあって一緒になったのです。 イエスキリストを信じる人は聖霊様によってイエスキリストとの神秘的な連合をします。 イエスにあって新しい命を得ます。 イエスキリストにあって身が復活されて変化された身を着るようになるでしょう。 イエスキリストにあって天の宝佐に座るようになります。 “罪過で死んだ私たちをイエスキリストとともに生かした”というお言葉と “また一緒に生かしてイエスキリストにあって一緒に天に座らした”というお言葉の間に “あなたがたが恵みで救いを得たことであるから”と言うお言葉が挿入されています。 このすべてのことが救いに含まれたことなのにこの救いは恵みからなったのです。
本文の 7 節に記録されるのを ″ それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった ″ と言いました。
イエスキリストにあってくださる神様の恵みは一世代に限るのではないです。 多くの世代の人々にも適用されるのです。 神様の恵みは極めて豊富であるからいくら多い世代の人々がいただいてもその分量の減る事がないです。 だから私たちはどうしようがもっと多い人々がイエスキリストの中に入って来るように力をつくして福音を伝えなければなりません。

本文の 8 節と 9 節に記録されるのを ″ あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。 ″ と言いました。
救いはイエスキリストを信じる者に賜るものである。 ところで分かってみればイエスキリストを信じる信仰までも神様の恵みによったのです。 恵みは神様の側での一方的な贈り物です。 だから救いをもらった者は謙遜することでただ神様に感謝と讃尿と光栄を差し上げる生活をしなければなりません。 また救いをもらったことに比べれば世の中のどの何もすべてささいなのです。 どんな苦難にあっても救いをもらったという事実によって耐えながら勝ち抜けなければなりません。
本文の 10 節に記録されるのを ″ わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。″ と言いました。
私たちを生まれかわるようになさった方は神様です。 聖徒はイエスキリストにあって新しい人に造られました。 新たに造られた人に新しい天、新しい地、新しいエルサレムをくださってそこで永遠に幸せを享受させます。 神様が私たちを “イエスキリストにあって” 善良な事のためになりました。 神様が知らせてくださった善良な事は神様を愛して隣りを愛する事です。 神様に対する愛は礼拝と敬虔生活で現われます。 隣りに対する愛は伝道と奉仕と救済で現われます。 私たちがこの世の中で住む間がイエスキリストにあって善良な事ができる機会です。

これから説教を結末をつけます。 アダムの子孫であるすべての人は絶望的な運命を持って生まれます。 こんな事実を示して “罪過と罪で死亡者”と言いました。 こんな人の上に神様の震怒がとどまっています。 この震怒の下にいる人は地獄の刑罰を受けるようになります。
人はどんな努力をしてもこんな運命から脱することができないです。 ところで驚くべきなことにあわれみの豊富な神様がイエスキリストを世の中に送って私たちの罪をあがないしました。
誰でもイエスキリストを信じれば救いをもらうようになります。 救いは神様の震怒を免れて天国に入って暮すようになることを意味します。

聖徒の皆さんは神様の震怒と地獄の刑罰に処するようになるしかない絶望の谷間からイエスキリストによって一気に救いの山頂で至る人になりました。 それは地獄に行く者から天国に行く者に移されたのです。 皆さんは最大の幸せと幸運を得たことが分かって常に喜んで感謝しながら生きて行くように願いします。